

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

3

## 妻に「明日には帰る」

■ 第1章「3・11」

東京電力福島第1原発の緊急時対策本部で後に復旧班に所属することになる横山英治(37)は、地震の揺れを事務本館2階の机の下に潜つてやり過ごそうとしていた。体重76kgの体が大きな揺れで机の下から何度も引きずり出されそうになる。

「もう勘弁して」

ようやく揺れが收まり、職場の壁にある各機の出力計をみると、運転中だった1～3号機のデジタル表示はいずれも「0」になっていた。原発では運転員以外にも「止める」「冷やす」「閉じ込める」という考え方方が浸透している。原子炉を安全

### 再び原発へ



地震で天井パネルが落ちるなどの被害を受けた福島第1原発事務本館=2011年3月11日(東京電力提供)

に停止させ、燃料を冷却し、放射性物質が外部に漏れないようにする、という考えだ。今は「止める」が成功した段階だった。

「みんな大丈夫か。外に出るぞ」

第一原発では一週間に避難訓練があつたばかりで、隣接する免震棟前に集合して点呼を受ける手順になつていて。横山は同僚たちが出て行くのを見届けると、防寒着を羽織った。外気温は4、5度。慌てて

津波の襲来を知らない横山は午後5時すぎ、自家用車でいったん自宅に会えたのは2週間後のことだ。た。(敬称略。年齢、肩書は当時。

帰るよ。晚ご飯は何がいい?」と携帯メールが来ていた。

「ああ、いたよー。良かったあ」横山

は安堵した。自宅から運び出した水や食べ物を手渡すと妻に告げた。「会社に戻るよ。行けば何かやべることはあるはずだから。明日には帰れると思う。じゃあね」

含め約6400人がいた。免震棟には600人以上が集まつていてなかつた。免震棟は海拔35mで、津波に襲われた区域とは25mの高低差がある。横山は原子炉制御システムなどをメンテナンスをする計測制御の担当だ。事故対応で原子炉水位計や圧力計などを生かさうと、重いバッテリーを抱えて何度も放射線量の高い場所に足を運ぶことになると、この

避難したのか、同僚の女性社員がシヤツ一枚で震えていた。女性は横山が卒業した双葉町の中学校の先輩だ。た。(敬称略。年齢、肩書は当時。近所の人尋ねると、避難したよう共同通信 高橋秀樹)